

冠詞研究会：意味形態関連の解説

by Y. HOSOYA (2009.08.22)

名詞の意味形態 (S. I-414)

1. 名詞は諸種の見地から諸種の大別を行うことができるが、此の際問題になるのは、普通名詞と固有名詞の区別、純ドイツ語、借用語、外来語との区別、文語、口語の区別、標準語、方言の区別といった方向ではなく、次の区別である。
2. 形式的見地から、可算名詞 (nomen computabile, supputabile, calculabile または numerabile) と不可算名詞 (nomen incomputabile 等々)
3. 内容的見地から、者型名詞、物型名詞、事型名詞

可算名詞 (有数名詞)(S. I-414)

1. 平たく言えば、「一つ二つと算えることのできる名詞」
2. 露骨な特徴：これらの物、或いは概念は、一つの有機的統一ある単位のごときのものであって、二分して二つの前と同じものを造ることができないという点を挙げることができる。

不可算名詞 (有量名詞)(S. I-414)

1. 「一つ二つと算えることのできない名詞」、たとえば、
 - (a) 物質名詞 [nomen materiae](水、肉、油、煙)、
 - (b) 抽象名詞 (火、光、力、運動、美、発展)、
 - (c) 具体名詞と抽象名詞の中間に位するような概念

意味と意味形態の区別 (S. I-414)

1. 可算名詞、不可算名詞とかいうのは「意味形態」であって、たとえば「発展」なら「発展」という名詞によってさしずめ考える「意味」とは一極言すれば一謂わば何の関係もない。意味は、たとえば水で、意味形態は器である。水に方円なし、器に方円あるのみ。
2. たとえば、「発展」(Entwicklung) という語は可算名詞か不可算名詞か?といったような疑問を起したり、可算名詞であれば従って不可算名詞でなく、不可算名詞であれば必然的に可算名詞でない、といったような考え方をすることは厳禁である。Wir haben Entwicklungen durchgemacht (我々は色々で発展段階を通過してきた)といえは Entwicklung は可算概念(擡頭から高潮を通じて解消に至るまでの、まとまった一発展)として考えられたものであり、Auf diesem Gebiete ist wenig Entwicklung zu bemerken (此の部

門では大した発展も見受けられない)と云えば、その Entwicklung は「活気」や「動き」や「熱」や「火」と同列の不可算名詞として考えられている。ここでは単に「器に方円あり」と云っているのであって、「水に方円あり」といっているわけではないのである。

「もの」と「こと」(S. I-414 ff.)

1. 「もの」(者・物)型名詞 (nomen substantiae) と「こと」型名詞 (nomen pragmatiss) : こんどは内容の方から来る大別である。この方は、只今の検討には直接関係はないが、時々註釈的に考慮する必要があるので、用語として説明することにする。哲学的に大観すると、人生という現象は、これは一つの「事」(Bewandtnis) であるが、世界とか森羅万象とかいう現象は、これは一つの「物」である。エネルギーは「事」であるが、物質は「物」である。言語に関していうならば、文は「事」であるが、語は「物」である。文法に関していうならば、動詞(純粹には定形)は「事」の表現であるが、名詞は「物」の表現である(それ以外の品詞は枝葉末節の現象である)。
2. ところが、吾人(人間というもの)自身は「事」であるにもかかわらず、吾人の面する所の「もの」、吾人の扱う所の「もの」、吾人の思惟する所の「もの」はすべて是れ「物」であるがゆえに、吾人の考え方の裡には、吾人自身を含めた三千世界の総てが「物」であるかの如き錯覚を生ずる。この錯覚が(極く少数の哲学を除いて)現今までの哲学である。科学技術も同じである。吾人自身はエネルギーであって、吾人の理解し、取り扱い、応用し、受益せんとするところの「もの」はすべて是れ「こと」であるにもかかわらず、(たとえば石炭という「もの」は理解できるわけのものでもなし、「ものを理解する」などということは、よく考えて見ればだいいち意味を成さない)科学は到る処に「物」をしか見ない、またその「物」と「物の関係」しか見ないことを称して科学というのである。言語も同様である。言語そのものは文であって決して語ではないにもかかわらず、吾人の関心は先ず第一に語に向けられてしまって、関心の安易な対象たる語から出発して逆に文というものを考え、たとえば語の集まったものが文であるといったような本末顛倒論を抱くようになる。文法も同様である。文が事であって語が物である限り、文の本質は動詞(純粹には定形)に在るのであって、「もの」の表現たる名詞に在るわけがないにもかかわらず、たとえば文の基礎をなすものは主語であるといったような、とんでもない考え方が現に相当根強く行われている。
3. そうした錯覚は、そもそも事として生れて物に直面する此の人間

というものの考え方に宿命的につきまとう範疇錯覚なのであるが、その錯覚は、まず、対面する世界という「もの」から逆に人生を見て人生そのものをまで無理やりに一つの「物」として眺めてしまふ素朴哲学に於てその最初の無理を曝露する。次には、素朴関心の一番手っとり早い対象たる物質というものから発して、逆にすべてを「物質と物質との間の関係」と見ようとする素朴科学に於てその第二の無理を曝露する。次には、文を表現する都合と便宜から生れた偶然の産物たる語から出立して、逆に語と語をならべて其の間に「生ずる」(生じたりするわけではないのであるが)関係を目して以て文と解釈せんとする素朴言語学に於てその第三の無理を曝露する。最後には、動詞(やかましく云えば定形)の都合と便宜が生んだ第二次的現象にすぎない名詞というものを以て、そもそも「語そのもの」と同一視し、こんどは逆転して、動詞という「事」型の根本事象をまでも「物」型の名詞として表現するという素朴文法において、そのまことに無理もない無理を曝露するのである。

4. 現存する哲学はすべて素朴哲学の延長であり、現存する科学はすべて素朴科学の拡大であり、現存する言語はすべて素朴言語の拡充されたものであり、現存する文法形態はすべて素朴文法の示す方向に向って歩んで来た足跡である。
5. ゆえに、「名詞」という考え方は、その本来の使命から云えば、すべて「物」または「者」でなければならないはずで、樹とか人とか筆とか駅長とか石とか、それとも高々光とか北とか点とかいったような内容が名詞という意味形態に最もぴったりとあてはまるわけなのであるが、実際存在する名詞を見渡してみると、必ずしも樹や人の型ばかりではなく、その他に更に俗に抽象名詞と呼ぶ名詞があつて、元来は名詞として考えるのが甚だ無理な現象をまでも、たとえば動詞までも名詞として取り扱う。元来「もの」型名詞ということばは、本当は Pleonasmus で、たとえば「円い形をした円形」とか「今晚の夕刊」とかいうのと一般であり、「こと」型名詞にしても、これもたとえば「四角な円」とか「今朝の夕刊」と同じような自家撞着なのであるが、斯様な形容をしないと指摘し得ないような或種の区別が現在生じてしまっているということは、これは儼然たる事実であると同時に、言語の言語たる本質を最も端的に物語る一つの興味ある「無理」である。いったい世の中に無理という現象ほど無理もないものはないからである。
6. 「もの」型名詞 (S. I-416)
 - (a) 「者」型: Mensch, Mutter, Hund, Fisch, Mars, Sonne, Teufel, Faktor, Träger, Krankheitserreger.

- (b) 「物」型：Haus, Buch, Berg, Milch, Zucker, Rauch, Mars, Sonne, Faktor, Träger, Krankheitserreger, Bewegung, Beweis, Krankheit, Leben.
7. 「事」型名詞 (S. I-416)
- (a) Bewegung, Beweis, Krankheit, Leben, Beweisen, Kranksein, Krankseinmüssen, Wiedergesundwerdenwollen, etc.
8. 二型に跨ってわざわざ同一の例語を挙げたのは、此の三つの意型の境界をあいまいにぼやかさんがためではなく、むしろ反対に、各々の意味形態の輪廓を鋭く浮かび上げせんがためである。たとえば、Krankheit は、Kranksein、即ち、病気だという事実、或いは病気にかかった状態を指す語としては事型であって、daß man krank ist といったような文章で云いかえることができるが、それがもし、或いは結核、或いは癌を意味するとすれば物型である。
9. 意味形態は、たとえば Kant の考えた時間、空間その他の諸範疇と同じで、それなくしてはそもそも意味というものを結び得ず、言語というものを成し得ない所の主観的形式であるから、物それ自体とは勿論何の関係もなし、意味それ自体とすらも往々にして大した関係がない。また、実際にあてはめようとすると、無理が生じ、独断の弊が生ずることが多い。しかも、無理が生じた場合に於て最もはっきりと「そもそも吾人の言語意識には元々意味形態という取り外すわけに行かない妙な色眼鏡がかかっているのだ」という事実気づくのである。)
10. 純粹の「事」型名詞というのは、たとえば Vaterschaft(子を孕ませた当の責任者であるということ)、das Geliebtwerden, das Nichtmehrkindseindürfen (*Hesse: Demian*), das Nichtrechts-und-linkschauen bei der Arbeit(*H. Böhlau: Rangierbahnhof*) 等で、大抵 daß, ob, wie 等の副文章で云い換えられるのが特徴である。従って、その本質上、複数形というものが無い。もし複数形があるとすれば、それはもはや「物型」名詞、或いはもっと正確に云えば可算名詞として取り扱われた証拠である。既に辞書に登録されるほど一般的にみとめられた「事」型名詞は、多少に拘らず必ず「物型」可算名詞に移ってしまっている。それは何故かというところ、「事型名詞」という概念がそもそも謂わば ein viereckiger Kreis のごときものであって、「名詞」となればそれはもはや「事」ではなく、「事」であればそれはもはや「名詞」ではない筈だからである。つまり、事をも物をもおしなべて「物」として扱う意味形態を称して名詞というのである。しかし、此の様な無理が伏在するにもかかわらず、とにかく或種の意局に立った場合には、明らかに「事」型としてしか感ぜられない抽象名詞が存在することは事実で

あって、それがまた言語の実際として、複数形の欠如とか、冠詞用法の特殊性として現にその本質を表して来るのである。

11. 「事」型の名詞が「物」型の名詞に転化するのに二つの場合がある。一つは、はっきりと可算名詞になる場合であり、他は、不可算名詞であることをやめないで、いわば「水」や「土」や「光」と同じような物質名詞 (nomen materiae) 或いは有量名詞となる場合であって、後者はほとんど純「事」型名詞として感ぜられる。たとえば、Bewegung (運動) は Sichbewegen (動くこと) の意に用いられれば純「事」型であるが、社会運動その他を指して Bewegungen とか eine Bewegung とかといえば、もはや全然可算名詞となり、また Dadurch kam Bewegung ins Gespräch (それによって談話が活発になった) といえ、この Bewegung は、原意たる Sichbewegen と同様の不可算名詞であるが、それは「事」型であるがための不可算型ではなく、むしろ有量型としての不可算型である (現に仏語ならば du mouvement となって、はっきりその partitiv な性格を示すことになる。独英では、無冠詞形であるために、強動的な無冠詞形などとの境界がはっきりしなくなる。)